カレイ

かれんと　いんふぉめ～しょん

2006.10.13 発行：No.54
TEL 03－3985－2628
立教大学図書館

図書・雑誌以外の資料には　どんなものがある？

目　次

図書・雑誌以外の資料には　どんなものがある？　p1
AV資料　p1
マイクロ資料　p2
電子媒体資料　p3
マスコミ学を学ぶための10冊　p4

みなさんは、図書館で利用できる資料というと何を思い浮かべますか？　図書、雑誌、新聞・・・おそらく多くの方は紙に印刷された資料と答えるのではないでしょうか。

今号では、そうした紙媒体の資料以外にどのようなものがあるかをご紹介します。おもに以下のようなものがあります。

1．CD－ROM，CD，DVD，ビデオなどのAV（Audio Visual）資料
2．マイクロフィルム、マイクロフィッシュ資料
3．オンラインデータベース、オンラインジャーナルなどの電子媒体

1．AV資料

（1）ＣＤ－ＲＯＭ

コンピュータの記録メディアとしてCD-ROMが使用されるようになったのは1980年代です。紙の印刷物に比べて大容量のデータを扱えること、直径12cmのコンパクトなディスクで場所をとらないこと、湿気や磁気などに強く、取り扱いが比較的容易であること、検索機能に優れていること等の利点があります。事典や辞書などレファレンスツール（詳細は図書館ホームページ参照）が多くあります。図書館では、メディアライブラリー、新座図書館等に設置されたパソコン、各館で貸出しているノートパソコンでご利用いただけます。

（2）ＣＤ，ＤＶＤ，ビデオ

本学では、多数の録音資料、映像資料を所蔵しており、著作権の利用許諾をとって多くの皆さんに利用できるようにしています。音声や音楽などの音を記録する資料を録音資料といいます。図書館では、録音音楽資料（CD・DVDなど）を約6000点所蔵しています。

また、ビデオ、ＤＶＤなど映像と音声が同時に記録されている映像資料も約7200点、所蔵しています。これらはメディアライブラリー、新座図書館で視聴できます。

2．マイクロ資料（マイクロフィルム，マイクロフィッシュ）

図書や雑誌、新聞など、さまざまな資料を写真撮影によって、縮小し、マイクロ画像化したものがマイクロ資料です。

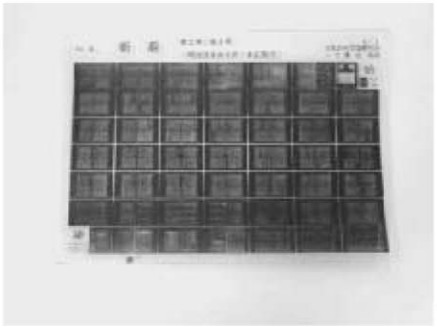
マイクロ資料には、マイクロリール（ロール）とマイクロフィッシュがあります。マイクロリールは最も一般的なもので、35mmあるいは16mm幅で100フィート（30.5m）の中に640コマの撮影が可能です。新聞なら１コマに１ページ分、雑誌や図書などでは見開き２ページ分がおさめられています。マイクロフィッシュは、１枚のシート状のフィルム（105mm×148mmが標準サイズ）に碁盤状にマイクロ画像を撮影したものです。Ａ４版の雑誌や図書なら60ページ分くらいをおさめることが可能です。本学では、マイクロフィルム・フィッシュあわせて約36000本を所蔵しています。

マイクロ資料の閲覧や文献を複写するためには、マイクロリーダー・プリンターが必要となります。本学では、図書館本館、人文科学系図書館、社会科学系図書館、新座図書館、新座保存書庫で利用可能です。OPAC検索をしてマイクロ資料と表示されたら、各図書館カウンターでお尋ねください。

マイクロ資料が作成される理由は、①長期保存用（紙質などの点で長期保存に耐えにくい資料をマイクロ化して保存)、②原資料の損傷防止のため（オリジナルは保存用として、閲覧用としてマイクロ資料を提供する)、③保管スペースの節約のためです。資料の種類別に見てみると、①古文書、貴重書、その他の記録類（例：立教大学新聞など)、②新聞（例：明治期からの朝日・読売新聞、Le Figaroなど)、③雑誌（例：六合雑誌、文章世界など）です。

マイクロリーダー・プリンタ

マイクロリール



マイクロフィッシュ

3．電子媒体資料 ～オンラインデータベース，オンラインジャーナル～

みなさんは、レポートや論文を書く場合にどのようなツールを利用しているでしょうか？

新聞や雑誌の中から自分の探したいテーマにあった記事や論文を探す場合には、記事索引を利用します。記事索引は、ほとんどオンラインデータベース化され、大学内のパソコンで図書館ホームページからアクセスできます。立教大学では、数多くのオンラインデータベースを契約しており、国内外の図書、新聞記事、雑誌記事、法令・判例等、ビジネスニュース、百科事典・辞典、人物、統計・調査等を検索、または全文を読むことが可能です（オンラインジャーナル）。

立教大学図書館ウェブサイト　http://opac.rikkyo.ac.jp/

GoogleやYAHOO！などのサーチエンジンは、ウェブサイトやウェブページなどインターネット上の情報を検索するためのものです。レポートや論文執筆の際にインターネットを検索したのみで満足をしていませんか？　インターネット上の情報は膨大ですが、誰でも情報を発信できるため確かでない情報も多く存在します。またサーチエンジンで探すことの出来ない情報も数多く存在します。これらの情報は専門のデータベースで調べることができます。レポートや論文を執筆するためには、サーチエンジンだけでなく、専門データベースも利用することが不可欠です。図書館では、こうした専門データベースの使い方の講習会を行っています。掲示や図書館ホームページでご案内していますので、ご利用ください。

メディアライブラリーと新座図書館

メディアライブラリー

新座図書館AVコーナー

池袋キャンパス７号館２階にあるメディアライブラリーや新座キャンパスの新座図書館では、パソコンで情報検索を行ったり、ビデオ・DVD資料・CD-ROMなどのAV資料を視聴したりできます。(持ち込み資料の視聴は不可) AV資料は禁帯出資料を除き、２点２週間まで図書とは別に貸出できます。他キャンパスのAV資料も図書と同様に取り寄せて利用することができますので、それぞれのカウンターでお申し込み下さい。

<読書ナビ>16回

マスコミ学を学ぶための10冊

服部 孝章
（社会学部メディア社会学科教授）

2006年4月、社会学部にメディア社会学科が誕生した。マスコミュニケーション、ジャーナリズム、メディア現象など新学科が取り組む領域は広く、社会学部のほかの２学科同様、学際的な視野を必要としている。マスコミ報道をめぐる問題（プライバシー侵害、報道規制など）、新聞・出版・放送・広告など各メディア別の課題、メディアの融合・再編、そして技術革新による変遷といった事象がある。そうしたなかで、10冊の書籍を選択することは、きわめて偏見と独断に満ちたものになる。ここでは、こうした諸問題に取り組むメディア社会学が、今日の技術革新による劇的な変化のなかで、よりよき明日をつくるために、貢献しなければならないこと、あわせて現在の社会状況にあってメディアをどのように位置づけるのか、私たち市民はこの変遷を続ける情報環境にあって情報主権者でなければならないことを確認しつつ、学生諸君に推薦することにしたい。

①フランスの社会学者ピエール・ブルデュー（櫻本陽一訳）『メディア批判』は、文化・社会状況が視聴率・部数至上主義によって〈テレビ化〉する現状を、市民はいかにしてメディア批判をなしうるかを明示する。

②原寿雄『ジャーナリズムの思想』は、ジャーナリズムの基本的役割を示し、日本の現状の問題点を指摘する。1997年の出版であるがジャーナリズム論の古典と言える存在になっている。

③小和田次郎『デスク日記』（１～５）は、②と同様の視座で1960年代の日本における報道状況を克明に追ったジャーナリストの記録として、今なお読み返される価値ある分析であるが、絶版。

④ウォルター・リップマン（掛川トミ子訳）『世論』（上・下）は、80年以上も前に書かれたものであるが、今なお現代的意義をもつ名著である。2005年９月の総選挙結果などにみられる民意の動向を解読するさいにもリップマンの指摘は有効だ。

⑤奥平康弘『ジャーナリズムと法』。ジャーナリズムをめぐる法的諸問題の根幹をめぐり判例をもとに明解な指摘を展開している。

⑥日高六郎編『戦後資料マスコミ』 占領期から1969年までのマスコミをめぐる諸問題にかかわる原典資料を広範囲な領域から収集している。残念ながら絶版。

⑦法学セミナー増刊『資料集　人権と犯罪報道』。犯罪報道のあり方を多様な側面から論じ、あわせて各関係団体の声明など多くの資料を集めている。絶版。

⑧水越伸『メディアの生成―アメリカラジオの動態史』は、ラジオがテレビに取って代わられる流れを、政治経済的側面から、そして新しい技術が社会化される様を丹念に追跡する。社会とメディアの生成を整理した画期的な研究である。

⑨門奈 直樹『現代の戦争報道』は欧米のメディア・ジャーナリズムに精通する著者が、「湾岸」から「イラク」戦争にいたる90年代以降の戦争報道を分析し、現代における戦争とメディアとの関係を解析し、加えてグローバル・ジャーナリズムの可能性を追求する。

⑩桜井均『テレビは戦争をどう描いてきたか　映像と記憶のアーカイブス』は、NHKスペシャル番組センターのプロデューサーとして関わってきた番組をはじめ、1950年代後半からこれまでの戦争番組を取り上げ、「アジア・太平洋戦争」「原爆はどう記憶されたか」「引き裂かれた人びと」「昭和史のなかの天皇」「戦争責任と戦後保障」という５つのテーマの下に各番組とそれが放送された時代を検証している。

上記10冊の文献は、はじめに述べたように独断的選択であるが、これらの書物は、その時々の時代と社会状況を緻密に分析し、情報の果たすべき役割とその問題点を指摘し、同時にその後のあるべき姿を展望している。絶版の文献をはじめ知的好奇心に響く書物があふれる図書館の海に乗り出し読破し、そしてより新しい発見を続けることを「学生」である「あなた」に期待します。

※文中にあげられた資料はすべて立教大学図書館で所蔵しています。

開館日程等については図書館のホームページでご案内しております。
（http://opac.rikkyo.ac.jp）
※その他変更がある場合はその都度、掲示でお知らせします。